親と子のコーチング

2月9日
地域プロジェクト
飯田ゼミ

はじめに

飯田ゼミでは、昨年の雲雀祭において、聖ヶ丘小学校のご父兄を10人ほど招待して、コーチングのWORKSHOPを行った。コーチングがなぜ職場が普及しているかは、効果的なコミュニケーションを通して、よりよい人間関係の構築や従業員の動機づけをあげてもらうことにある。コーチングの技法は、親子の関係改善のためにも、積極的に導入されてきている。それは、もはや親の権威だけでは、子供が納得しないからであろう。親子の間で、会話なしの状態が続き、口論ばかりしている家庭は意外と多いのではないだろうか。ここで、飯田ゼミでは、いわゆる「不機嫌な家庭」に焦点をあて、その親子の会話分析をして、よりよいコミュニケーションはいかに構築できるかを父兄の方々とともに考察した。

会話設定は以下のようにした。

設定

母親―塾にいかせたい気持ちで一杯の気持ちで会話を始める、
子供―ゲームが終わったら、塾に行きたい気持ちで会話を始める、

なぜ、二人のコミュニケーションは悲惨な結果に終わったか？

>>>>>>>>会話内容<<<<<<<<

リビング・ルームにて

母「早く塾に行きなさい、良夫」

良夫「もうちょっと、待って、ゲーム終わるから」

(30分後)

母「あんた、まだ、ゲームしてんの。何してんのよ。完全に遅刻じゃない」

良夫「もうすこしで終わるって、ちょっと待って」

母「うるさい」コンセントを引き抜く。

良夫「何すんだよ、セーブできないじゃないか」

母「あんた、塾にいくらかかっているのか分かってんの。友達の明ちゃんは、きちんと行って、成績も上がってきて、有名中学にも入れるって言うじゃない。」

良夫「……　」

母「あなたのためを思っていってるのよ、言いたいことがあるなら、はっきり言いなさい」

良夫「俺だって、がんばれば、明ぐらいの点はとれるよ」

母「ふん、どうせ、できっこないわ、あなたっていつもそうなんだから。ついでに、クラスの中山って子と付き合うんじゃないわよ。いつも、塾の帰り、二人でスーパーでぶらぶらしているって聞いたわよ」

良夫「どこから、聞いたんだよ」

母「塾の先生からよ。この間、電話がかかってきてね。あんたは親の期待を裏切ってばかりいるよ。もうたくさん、がっくりよ」

良夫「俺、もう塾、やめた。いかない」

母「勝手にすれば、お母さんはもう知りません。いかなくてもいいけれど、その代わり、これからは、おこずかいはあげません」

良夫「……」母親をにらみながら、自分の部屋に入っていく。

二人は未来を閉ざした格好で会話を終えてしまいました。あなたなら、どのような会話を試みますか。毎週、違ったシーンで、よりよいコミュニケーションを目指した台詞を考えていきます。

結論

父兄とのディスカッションの結果、結論ではコーチングの三大原則である、（１）傾聴の態度、（２）承認の態度、（３）質問の態度を会話に入れていくことで合意した。このコーチング・テクニックによって、子供の意欲、自発性が生まれ、合意形成ができやすくなると仮定できた。結論では、親の発話として次のような態度・感情管理が求められるであろう。

1.できるだけ、子供側に合わせた目線ではなす。（大人の論理は通じない）と覚悟する。彼らは企業組織における上司―部下の関係ではない。
2.二者択一の相手を追い詰める発言はさける。
3.決して感情的な叱り方はしない。
4.子供の心理状態を見極め、合意形成向かう（この場合は塾にいくこと）
5. 子どもの気持ちを無視した否定的な発言は避ける
.
課題

コーチングは、強い立場にある人からの弱い立場にある人への、よりよい人間関を構築しながらの、現状打開のコミュニケーションとみなし得る側面もある。そこには、強者（管理者）における「気配り」「感情の管理」「葛藤の処理」が求められる結果、強者（管理者）に大きなストレスを生む場合もある。この課題をいかに克服していくかは、強者（強者）におけるメンタル・ヘルスの問題にもつながっていくであろう。